

修士論文要旨

仏教が担う看取りの文化と地域再生

中 村 陽 子

目 次

序 論

本 論

第1章 日本社会の現状と仏教の役割

第1節 日本社会と仏教の現状

第2節 日本社会における仏教の役割

第2章 看取りの文化について

第1節 看取りの文化とは

第2節 看取りの文化とケア

第3章 都市・農村地域における看取りの実践と課題

第1節 誰にも用われることのない無縁仏の現状を知り看取りの文化を考える

第2節 高齢者介護を通して看取りの実践

第3節 都市のホームホスピスでお念仏で暮らす豊さんのこと

第4章 仏教の役割と看取りの文化の再構築に向けて

結 論

引用文献

団塊の世代が高齢期を迎え、これから日本は更に少産多死社会が予測され、2038年には死亡人口は170万人を超えると推定されている（厚生白書2009）。終末期の援助は病院のキャパシティをはるかに超え、医療・介護の社会資源や地域の看取りの力の枯渇が危惧される。

かつての日本社会には、血縁、地縁、社縁といった個人間の相互扶助が機能し、これまでの日本社会はこうした縁に守られてきた。しかしながら、これらの縁が薄れて「無縁化」し、その結果、誰にも看取られずに亡くなっていく人が増えている。

仏教を基盤とした看取りの文化においては、さまざまな習俗、しきたり、風習が伝えられ、その地域独特の生活様式や価値観として形成されてきた。地域で死に向き合うことは看取りの力が試される。私たちが希望する終末期の生活は地域の特性と関わりが深く、地域の相互扶助やこれまでの生活習慣が大きく影響しており、これまで仏教が担ってきた「看取りの文化」の

衰退が地域の相互扶助のあり方に関係しているのではないかと考える。

本研究の目的は、仏教が果たす役割として、「看取りの文化」の再構築が地域の力の再生になることを、都市と過疎地域において明らかにすることである。また、「看取りの文化」の意識の変化が地域の助け合いの文化（相互扶助）にどのように影響しているのか知ることである。

日本社会の現状と仏教の役割

特に今後増加する高齢者の死に場所の問題は緊急性が高い。1970代以降、日本人の死に場所は、在宅から病院へと移行した。しかし、社会保障制度見直しが迫られる今日の医療情勢において、政策として在宅での看取りが推進されている。日本の寺の数は2000年の8万6586から2006年8万5994へと減少している。同時に檀家数も減少し、葬式仏教と揶揄されている。しかし反面、生老病死はますます自己の問題として深く存在し、仏教の役割は重要となっている。仏教（浄土真宗）の教えの中に、その悲しみ苦しみを乗り越える道があることを指し示し、実践することがこれからの仏教に求められる。仏教への期待として、生きるという苦悩への対応や、地域への具体的な関わりが求められているのが今日の仏教の現状である。

看取りの文化について、「看取りの文化」とは古来、看取りや人の死にまつわるさまざまな習俗、習慣、しきたり、風習が伝えられ、その地域と特有の生活様式や価値観として形成されてきたものである。それは私たちが意識しないにもかかわらず、生活の中に溶け込み、その地域に生まれ育った人の価値観や思考に影響を与え、地域社会をまとめる原動力となっていた。

本研究では、看取りの文化を「終末期以前から死亡以後まで死の悲しみに寄り添い、本人およびその家族を見守り支援すること」と定義する。仏教は葬儀以降、1周忌に至るまで多くの法要があり、僧侶をはじめ有縁の人々は残された家族と関わり、悲しみと向き合う時期を共にしてきた（悲嘆の作業、グリーフケア）。この悲しみの共有と気遣いあう文化が看取りの文化であり、地域の「困ったときはお互い様」の相互扶助に基づく地域の力を構築してきたと考える。

これまでの歴史をふりかえれば、仏教には役割があると考ええる。特にこれまで医療、福祉、介護という制度では担いきれない、「どうしようもない苦」を仏教、浄土真宗が担うことの重要性を指摘したい。親鸞聖人が道綽禅師の『安楽集』の文を引用され、自身の生活で大切であると感じたものを伝えて導いてほしいと託されたと記されている。「前に生れしものは後を導き、後に生れし人は前を訪へ、連続無窮にして、願わくは休止せざるしめん」と欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆゑなり」（『注釈版』p. 474）

看取りの文化においては、後から生まれたものが、先に生まれたもの（高齢者）を尊び気遣う。先に生まれたもの（高齢者）は、後に生まれたものを死をもって導く。この関係はケアの

概念と相まって暮らしの中で死を迎えるための大きな力として存在する。そこで、都市・農村地域における看取りの実践と課題を理解するため、誰にも吊られることのない無縁仏の現状を知り、寺院の役割と共に仏教が社会に求められる役割を考えることを目的に、富山県高岡市の日蓮宗大法寺を訪問した。

住職の「無縁仏という事実がある。社会的問題に仏教が答えたい。」という思い。また「生きた証として当寺に記録を残してあげたい。」「教義的には疑問はある。」が、しかし止むにやまれない気持ちが深く理解できた。最後に栗原啓允住職は、日蓮聖人の「臨終のことを習うて、後に他事を習え」を拠り所に行っていることを語られた。また、高齢者の暮らしの場として、病院でも施設でもない「ホームホスピス」という新しい暮らしの場で行われている看取りを基に、地域の課題と仏教の役割について明らかにすることを目的とした調査を実施した。

調査の結果、介護の現場では、介護の対象者である人々の日々の生活の中に仏教があった。「死がタブー」とされる社会から、「死から学ぶ」ことや「お浄土の力」を地域に取り戻し、看取りの文化の再生に奮闘していた。また、死を悼み合うことにより支え合ってきた相互扶助の社会が仏教によって培われてきた事実に向き合い、看取りの文化の継承、再構築への取り組みが行われている。仏教が、こうした介護の現場に今後どのように関わり、その役割を果たしていくのかが問われている。

多死社会になり、死は多くの人々にとって最大の課題である。死を前にし、看取る人、看取られる人に、「仏さんがいらっしゃる」(田畑2012)と言える医療や介護は、看取りの力を持った地域によって支えられる。地域が看取りの力を持つためには「老病死」を受け取ることが大切なことが明らかになったが、この役割を負うことが仏教の役割である。

「老病死」を受け取ること、死者を通して死と関わることは地域と社会的なつながりをもたらす重要な意味をもつ。新しい社会のモデルは看取りの文化をもった地域の再生にあり、その力を仏教は持っている。

参考文献

- 市原美穂『ホームホスピス「かあさんの家」のつくり方—ひとり暮らしから、とも暮らしへ』木星舎(筆者が要約した定義を加えた) 2011
- 大谷光真・上田紀行「今、ここに生きる仏教」平凡社 2010
- 岡部健「家に居たい患者さんに在宅ホスピスケアができること」『緩和ケア』16 2006
- 岡部健「看取りの文化、地域から再構築—在宅医療の立場から」『公衆衛生』72巻3号 2008
- 島田裕巳「葬式は、要らない」幻冬舎新書 2010
- 新村拓「医療化社会の文化誌」法政大学出版 1998
- 新村拓「在宅死の時代—近在日本のターミナルケア」法政大学出版 2001
- 新村拓「看取りの文化とその歴史」日本歴史看護学会第17回大会記録集特別講演 2004

- 末本文美士「現代仏教論」新潮新書 2012
 高橋卓志「寺よ、変われ」岩波書店 2009
 内藤知康「実践真宗学研究科設立の意義」『龍谷大学論集』第476号 2010
 尾藤正英「江戸時代とは何か」岩波書店 2006
 ビハール医療団編 田畑正久「医療文化と仏教文化」『ビハール医療団—学びと実践—』自照社出版
 2012
 広井良典「終末期における福祉的ケア」『ターミナルケア』14 2004
 広井良典「コミュニティを問い直す」ちくま新書 2009
 満井秀城「巻頭言」宗報 6月号 2010
 安井猛「日本人の死生観と看取りの文化」在宅緩和ケアボランティア養成講座講演 2008年度
 「浄土真宗本願寺派葬儀規範解説—浄土真宗葬送儀礼—」2011
 「浄土真宗本願寺派葬式規範勤式集」1986